

今回、応募作総数が一気に増え、二十二篇もの作品を熟読するという、審査委員としては大変でもあり、なおかつ非常にやりがいのある選考となりました。

継続は力なり、と言いますが、超然文学賞という場が少しずつでも、文芸に関わる高校生の皆さんにとって近しい場になってきたことを、第一回からの経緯を見て来た者として嬉しく思うのです。

作品に一通り目を通して感じたことは、昨年から続く新型コロナウイルス禍、この非日常の影響を直接描写した歌がほんの数首しか見当たらなかったことです。これは昨年もそうでした。高校生の皆さんの生活が、疫禍の影響を受けていないとは思えません。しかし、まだ短い学生生活の中で、疫禍以前の生活との比較が難しいのだろうか、とも思いました。とはいえ今後、皆さん自身が主体として社会生活を送る時がいずれ来るわけです。どうかこの疫禍の日々を記憶しておいてください。これは大切な時代の経験になります。

しかし、その一方で今回、家族や家庭の時間や、小さく微細な視野の観察、個人の内面に没入した作品が目立ったのは、やはり疫禍により日常の行動が制限された影響なのかも、とも思いました。

こういう時にこそ、私たちは想像力を羽ばたかせ、より広く深い、人間の心理に思いをはせる必要があります。それが、とりもなおさず、私たちの生活を取り戻すことに繋がるのです。

今回の応募作は、非常に作風が広く、さまざまな視点が提示されており、大変頼もしく思ったことでした。その中でも、やはり細部にしっかりと観察眼を注ぎ、具体的な描写に徹した数編に、選考会では注目が集まりました。最優秀賞に選ばれた加藤千晶さんの「母の名」はやはり、歌にとりあげる具体物の選び方がとてもよい。例えば一首目「蝉の声聞きながら息吸いこめば夏野であった畳の匂い」、ここで「畳」という具体物、さらにその「匂い」を取り出してくる手つきは鮮やかです。イグサの匂いを感じられるようです。それは「夏野」という幻想的な単語の効果であることは言うまでもありません。

加藤さんの一連はこのように、具体物をしっかりと描くと同時に、それを少しだけ現実からずらして幻想を掻き立てる比喩の力に満ちています。「放課後を走る自転

車川光る「ジャンヌ・ダルクの灰を流して」など、明るさと鬱屈とを取り混ぜて描く技が巧みです。そして「母の名を一分思いだせなくて瞳は思いだせないままで」といった、母への屈折した思いを中心に家族や他者を描く挑戦に、思春期の新鮮な詩情を見出しました。

優秀賞となった岡奎那さんの「一方通行」は、鋭利な刃物のような冷たさとひらめきを見せる一連です。一首目「ぜつぼうの新幹線にまたがって友の言葉を轢き殺す朝」、冒頭からいきなり提示されるこの攻撃心、正直、良くわかるなあ、と共感しました。私たちが常に抱く焦燥を「ぜつぼうの新幹線」と表現してみせた点に、卓抜したセンスを感じます。「夢の中であなたに抱っこされたけど残像みたく父の姿が」、相聞でありつつ父への複雑な感情を表出したユニークな一首で、そうですね、私たちはだれもが、このように複雑な感情を抱きかかえつつ生きている。それをヴィヴィッドに表現した作品でした。

同じく優秀賞、渡邊美愛さんの「青春病」、軽やかな修辞により、現代ならではの不如意感を浮かび上がらせる、暗喩的な一連と読みました。「まだそこに敵がいるから昼顔のごと諦めた顔をしておく」、言葉のポップさに反して、この暗くうごめく感はなかなかです。朝顔ほどには目立たない、それでいて「昼顔」という午後のやわい光を感じさせる花のチョイスが絶妙です。「夕焼けは燃えるばかりの水銀でもういいかいの終わりが来ない」。世界に一人置いてけぼりにされた気分が、よく出ています。全体的に現代短歌をよく勉強している人だなと思いました、同時代歌人の影響がやや生に出すぎているかなあ、とも思いました。

それでは以下に、佳作のお三方の歌を一首ずつ。まず、山田真滉さんの「宙」より。「駅ビルから見下ろす交差点の人上を全く見ないで歩く」。たしかに、上空から見下ろせば、私たちはなんと無防備な姿で地上を歩いているのかと驚いてしまうでしょう。現代都市の風景をシャープに切り取って、かすかな批評精神がスパイスになった一連でした。

芳谷優斗さんの「チーズケーキの行列」。諧謔精神にあふれる一連で、物事を多面的に捉える楽しさがありました。「アオミドロのように列なす人間の先にチーズケーキよ駅前」。ちょっとやりすぎ感も漂いつつ、これくらい言った方がいいでしょう。結句の処理もテクニカルですね。

片山藍美さんの「青の純度」。安定した修辞、抑制された感覚が見事でした。「開戦の前夜のようにしらじらと銀のポールにわたしが映る」、このポールは電車内の手摺りか何かでしょうか。素直に感情をトレースしつつ、そっと挟まれた不安に共

感します。

最後に嬉しいお知らせが届いたので付記しておきます。一昨年、昨年と連続入賞を果たされた谷地村昂さんが「まっすぐ光る」三〇首により、第六十四回短歌研究新人賞の候補作として入選されました。真によろこばしく、また、全応募者の励みにもなるだろうお知らせです。入賞された皆さん、惜しくも入賞を逃された皆さん、どうか今後も、世界をみつめる〈言葉〉という道具を大切にして、現代を歩いてください。